

北西からの季節風と「東越谷河畔(かはん)砂丘」

関東平野で「風」と云えば、何と言っても「上州の空っ風(からつかぜ)」である。すなわち、冬季に北西から吹き付ける「季節風」のことである。

その北西からの「季節風」によって、過去に形成された地形に「河畔砂丘」がある。関東地方では、かつての利根川の流路(流路跡を含む)沿いにしか存在しない。

越谷市東越谷には、北から南に直線状に、長さ五百M、幅七十Mに及ぶ「東越谷河畔砂丘」が存在する。東福寺に最高点があり、低地との比高は水準測量によれば六・〇九Mで、最高点付近では四・二五Mの「風成砂(ふうせいさ)」が確認された。

越谷市内には、かつての利根川の本流であった元荒川(流路跡を含む)沿いに、この「東越谷河畔砂丘」の他に、「袋山河畔砂丘」、「大林河畔砂丘」、「北越谷河畔砂丘」、「大相模河畔砂丘」の、併せて五つの「河畔砂丘」が存在する(平社・佐藤、一九九三)。

「河畔砂丘」の形成に関しては、蛇行する流路の袂(べい)状部の風下側(東側または南側)に出来やすいことが明らかにされている(多田、一九四七)。

つまり、蛇行する流路が「西側または北側」に湾曲する場合、河道の「東側または南側」の袂状部に「ポイント・バー(蛇行州)」が発達するため、その砂粒が冬季に北西から吹き付ける「季節風」に吹き飛ばされ、背後の自然堤防の上に堆積することにより、「河畔砂丘」が形成される。

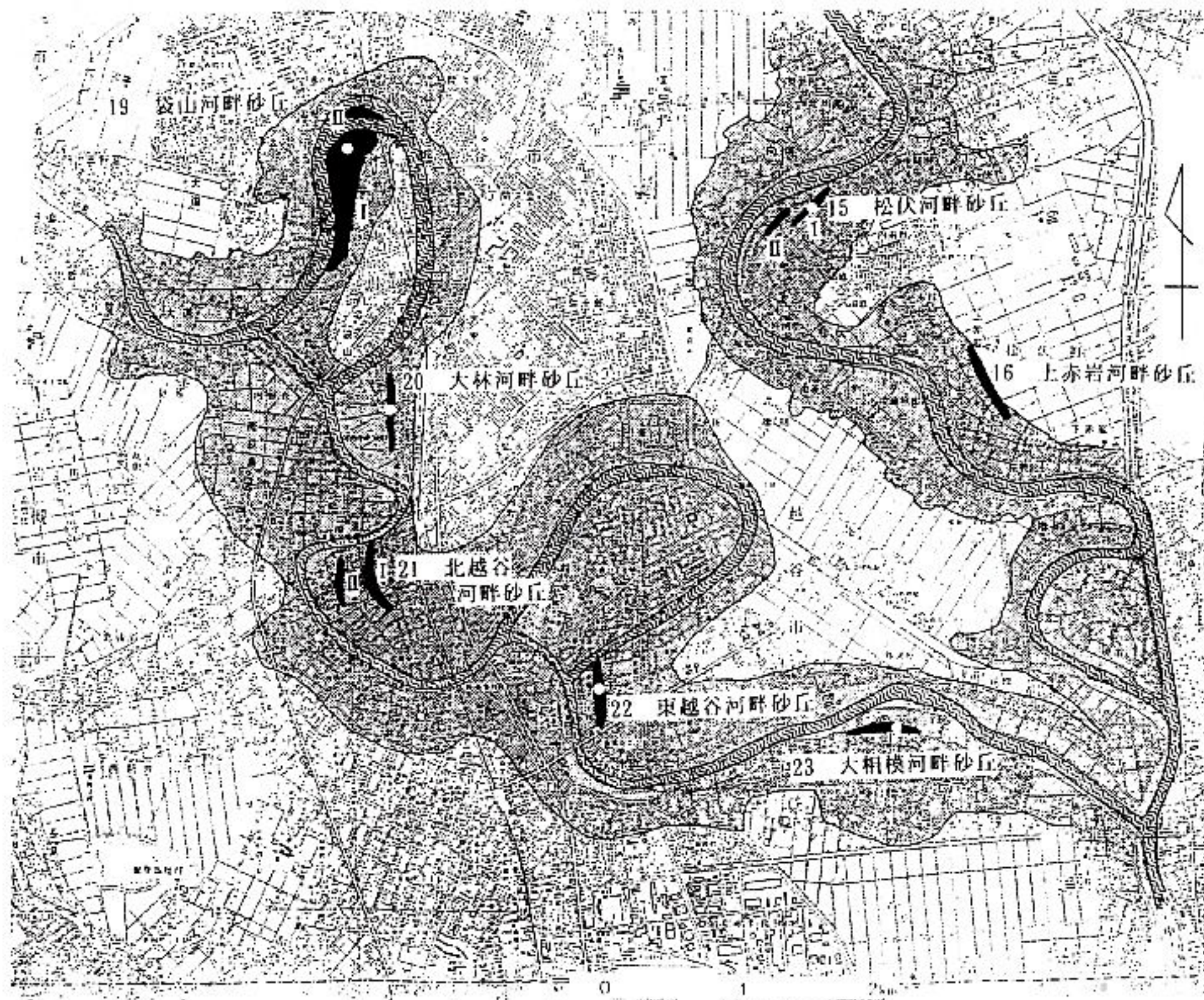
しかし、蛇行する流路が「東側または南側」に湾曲する場合、河道の「西側または北側」の袂状部に「ポイント・バー(蛇行州)」が発達するため、その砂粒が冬季に北西から吹き付ける「季節風」に吹き飛ばされても河道に落下してしまい、背後の自然堤防の上に堆積することはない(高山、一九九四)。

「河畔砂丘」の形成された年代は不明であるが、春日部市に存在する「浜川戸(はまかわど)河畔砂丘」の「砂丘砂」の基底近くで、平安時代の終わり頃の土器が出土し、同「砂丘砂」の上で、「弘安六年(一一八三)六月」と記された板碑が出土している。この「河畔砂丘」は平安時代の終わり頃から形成が始まり、鎌倉時代の中頃には完成していたことになる(平社・佐藤、一九九三)。

越谷市と松伏町の河畔砂丘と周辺の地形

平社定夫・佐藤和平(1993)『中川水系 I 総論・II 自然』埼玉県

94頁を転載



本文脚注

高山一(一九九四)『幸手市史 自然環境編I』幸手市教育委員会、五七〜六一頁

多田文男(一九四七)『利根川中流部の河畔砂丘』『地理学評論』二二 日本地理学会、一〜五頁

平社定夫・佐藤和平(一九九三)『中川水系 I 総論・II 自然』埼玉県、八二〜一一八頁

「河畔砂丘」のでき方(模式図)

堀口萬吉監修(2000)『埼玉の自然をたずねて』築地書館

41頁を転載

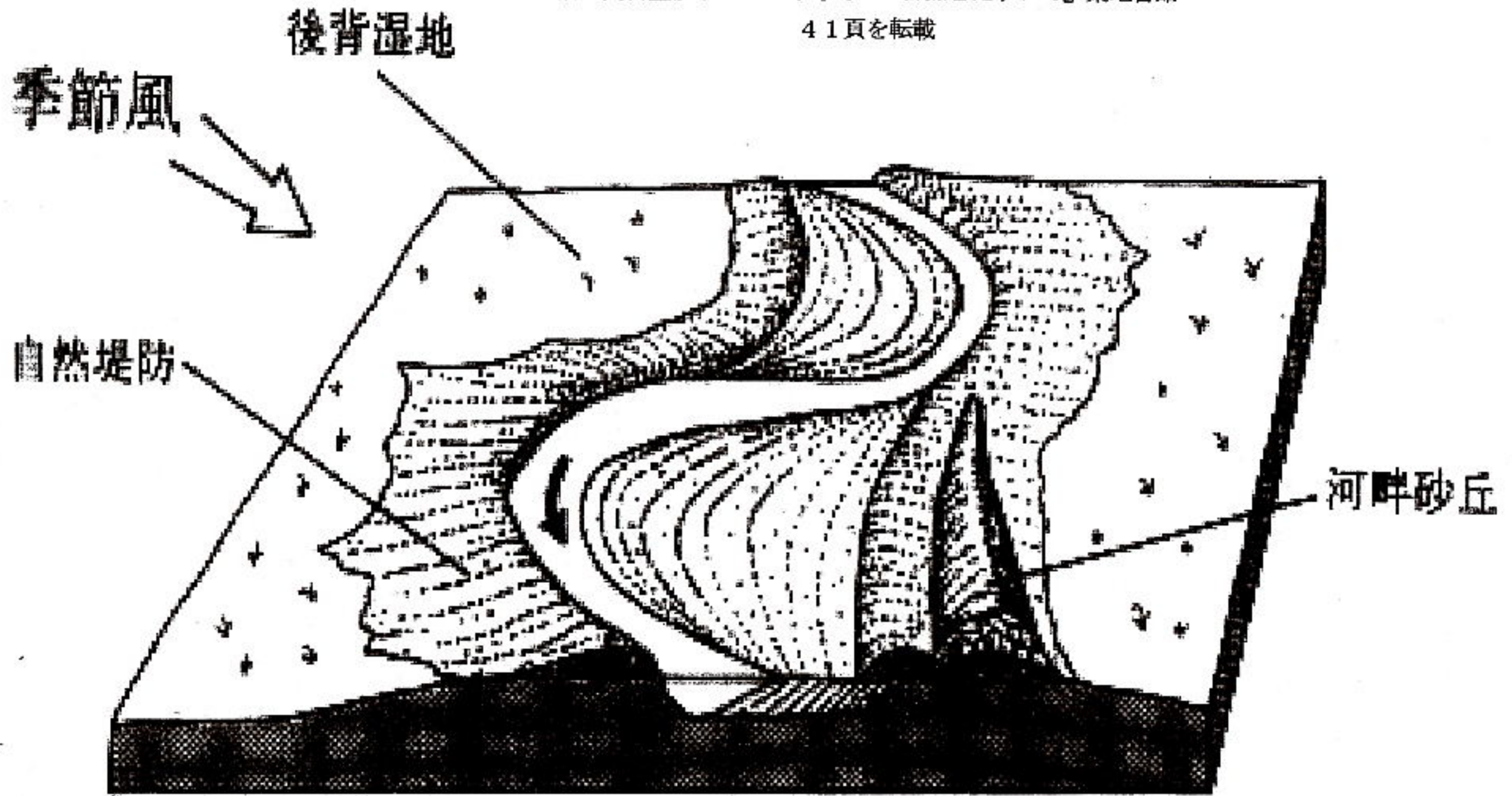


図3 河畔砂丘のでき方(模式図)

風に衣のすそをひるがえして、

照蓮院のお地蔵さん

瓦曾根の照蓮院には、めずらしいお地蔵さんがおられます。

ころものすそが、風に吹かれて、ひるがえっています。

こういうお姿のお地蔵さんは、全国的にもあまりないようです。

お地蔵さんが、歩きながら「行(ぎょう)」をしているお姿を表しているものとか、ひとびとを極楽へお迎えをするために、いそがしく歩き回っておられるお姿だとかの解釈もあります。

「風」という文字をつけた「ことば」に「風声」ということばがあります。これは「教え」という意味です。

「風教」ということばがあります。「ひとびとを、それとなく、教え導いて、善に移らせる」という意味だそうです。

「風化」ということばもあります。これは、「よい教えでひとびとを、善に導く」という意味です。

お地蔵さんのすそがひるがえっているのは、こういう「風」を表しているのかも知れません。

迷えるひとびとを、深い慈悲心をもって、救済しようと、世の中を、ころものすそをひるがえしながら、歩きまわっておられる、お地蔵さん。そういうめずらしいお地蔵さんが、越谷におられます。



照運院（越谷市瓦曽根）藏・木造地藏菩薩立像・江戸時代中期・寄木造り